

高等学校英語教科書における発音指導項目の分析

An Analysis of Pronunciation Instruction Items in Japanese High School English Textbooks

杉内 光成

獨協埼玉中学高等学校

Abstract

This paper investigates the inclusion of pronunciation instruction features in Japanese high school English textbooks for the academic year 2022. While numerous studies have explored pronunciation instructions through methods such as teachers' self-experience, questionnaires, textbook analysis, class observation, and syllabus analysis, none have specifically focused on textbooks aligned with the 2022 Course of Study. The analysis encompassed four English textbook series, scrutinizing phonetically related elements such as phonetic alphabets, pronunciation manners, stress, intonation, connected speech, and identification of thought groups. The findings reveal that each textbook addresses at least one of these categories in diverse ways, with distinct emphases and approaches to pronunciation instruction. Moreover, there is a discernible decrease in both the variety and frequency of pronunciation instructions compared to previous studies, indicating an issue that warrants attention. Consequently, this suggests a need for English education in Japan to consider the integration of pronunciation instruction with other skills and its treatment within the classroom context.

キーワード: 高等学校英語検定教科書, 発音指導, 教科書分析

1. はじめに

本稿の目的は、令和 3 年度検定済の高等学校英語検定教科書における発音を中心とした音声指導項目に焦点を当て、発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、音のつながり、ポーズの 6 項目を整理し、それらの提示内容や提示方法を分析し、4 種類の教科書で

どのような工夫を行っているのか、またどのような違いがあるのかを考察し、高等学校で行われている発音指導の実態について考えていくことである。

1.1 日本における発音指導の実態

全世界の英語使用者のうち非英語母語話者が占める割合は 75% を超え、英語学習者が目指すべき目標が「母語話者のような発音に近づけること」から「相手に伝わる発音を習得すること」に移り変わった (Walker, Low, & Setter, 2021)。その影響から、Intelligibility を向上させるために必要となる音声指導項目を指導すべきであるという考えが広まってきている (Munro & Derwing, 2015; Levis, 2018)。

日本の英語教育においても、英語によるコミュニケーション能力の育成を目標として掲げるようになった。令和 4 年度より年次施行の学習指導要領では、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能の習得が求められており、身に付けるべき資質・能力の 1 つに「音声」を挙げている。その具体的な指導事項は (ア) 語や句、文における強勢、(イ) 文におけるイントネーション、そして (ウ) 文における区切りの 3 つとされている (文部科学省編, 2018)。

このように、目的や場面、状況などに応じたコミュニケーション能力育成のために音声の能力を身につけるべきであるとされているが、実際に行われている発音指導には多くの問題点があると指摘されている。有本 (2022) は、教室での発音指導がどのように行われているかについて標準的な手法を紹介し、新出単語の発音練習がクラスで一斉に行われることから正しくできているか個別に判断することができないことや、本文理解後の音読活動において教師が音声面での準備をせずに音読活動を実施していること、さらに発展活動でよく行われるスピーキング活動において音声面への指導があまりおこなわれていないという 3 点を解決すべきだと指摘している。手島 (2011) は、生徒が英語を話すだけで良しとしたい教員の心情だったり、教員が発音指導の方法がわからなかったりなどの理由から、生徒の発音はいまだに相手に伝わらない「カタカナ発音」が主流になってしまっていることをはじめ、中学校・高校で行われている発音指導の問題点を指摘している。東後他 (2009) は、「現実の指導は担当教員の裁量によるところが大きいと、かなり本格的に指導を受ける生徒がいる一方で、ほとんど発音指導を受けずに大学に進学する生徒がいるのも事実だ」(p. 39) と教員の裁量によって、生徒が受けることのできる発音指導に幅があることを指摘している。さらに、田邊 (2018) は、「英語科では 4 技能に関しての AL (アクティブ・ラーニング) への対応は増加しているものの、英語音声指導、とりわけ発音指導分野では、AL をいかに取り入れるかに関しての研究・事例は数少ない」(p. 39) と指導方法に関する問題点について言及しており、主体的・対話的で深い学びを取り入れた発音指導の実現を

目指すべきであると主張している。日本英語教育の発音指導は、まだ改善の余地を多く残している。

1.2 検定教科書分析

では、日本の英語教育界がグローバル社会で求められている「相手に伝わる発音」を習得することに焦点を置いた指導にベクトルを向けていくにはどうすればよいのだろうか。そこで、発音指導の実態を調査・把握することにより、解決策へのヒントが見つかるのではないかと考えた。実態調査の手法としては 1) 経験則をもとにしたもの、2) 教員・学生へのアンケート調査、3) 教科書分析、4) 授業観察・分析（短期・中期・長期）、5) シラバス分析などが挙げられている（田邊・中野, 1999）が、本稿では 3) 教科書分析により、3 種類の教科書について音声指導項目（主に発音に関するもの）を分類し分析した。

上記の 5 つの手法から教科書分析を選んだのは、教科書は公教育において重要な役割を果たしており、さらに教科書分析が学問領域として歴史的に確立しているからだ。Apple and Christian-Smith (1991) は、教科書には合法的な知識と文化が含まれており、知識の伝承に大きな役割を果たしていると主張している。また、王 (2013) は「教科書分析は 1970 年代から学問領域として成立し、様々な視点から分析が行われてきた」(p. 247) と教科書分析が英語教育研究において、主要な研究手法の 1 つであるとしている。

2. 先行研究

発音指導に関する教科書分析は、研究対象としてあまり多く取り上げられている分野ではない（上田・大塚, 2011; 王, 2013）。しかし、先行研究例を見ていくと、日本英語教育の発音指導がたどった軌跡を見ることができる。

2.1 横断的分析

教科書を横断的に分析しているのが上田・大塚 (2011) と柳田 (2017) である。上田・大塚 (2011) は 2006 年度施行の学習指導要領に則った中学校検定教科書各 3 年分を、発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり（連結・脱落・同化）、ポーズ（意味グループごとの区切り）、OI（音声表現）指導という 6 項目の発音指導項目に整理し、それらの提示内容や提示方法を分析している。また、各音声項目の提示分布、カバー率を表にまとめ、提示方法についても言及がされている。分析結果から、教科書では大学の音声学で学ぶ基礎的な項目がかなり提示されていることに言及しつつも、教科書によって音声指導項目における重点の置き方や記号の使用などが大きく異なっているという問題点を挙

げ、音声項目ごとにその詳細や改善策を提案している。

高等学校の英語検定教科書を扱ったのが柳田（2017）である。柳田（2017）は平成 28 年度検定済みの高等学校英語検定教科書において、教科書のどこで発音指導事項が提示されているかに着目し、発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、音のつながり、ポーズの 6 項目がどのように扱われているかについて分析した。発音記号に関しては、発音記号の提示は、子音については 8 割以上の教科書においてカバーされていたものの、母音はカバー率に差があったことを指摘している。発音方法の項目では、具体的な発音方法を説明しているのは半数の教科書に留まり、顔や舌のイラストは掲載されていなく、学習者目線で考えると、イラスト等の掲載はすべきであると主張している。強勢については、語強勢より文強勢に重きが置かれているとしている。イントネーションは、教科書間での差が大きく見られたことを報告している。音のつながりは、スラーを使って示されることが多いことと、連結、脱落、同化の違いを詳しく解説している教科書が少ないことに言及している。ポーズについてはがスラッシュ (/) を表記していた教科書は半数あるが、そこに解説を加えていることはほとんどなく、どこにスラッシュを入れるべきなのかの詳細かつ理論的な説明をするべきであると主張している。結果として、全ての教科書において発音に関して様々な項目は提示されているが、音声指導項目の提示場所や重点項目には教科書によってかなり違いがあることが明らかにされている。

2.2 縦断的分析

教科書を出版年ごとに縦断的に分析しているのが上田・大塚（2013）と杉内（2022）である。上田・大塚（2013）は 2012 年度施行の中学校学習指導要領に則った教科書とそれ以前に使用されていた教科書を、教科書内の音声指導材料の取扱いや学習者への指導項目の提示量またその方法の変化を縦断的に分析し、考察した。分析結果から、教科書内で大きな変更が見られたのは発音、イントネーション、スピーチ指導の 3 項目であり、学習指導要領で示されているように、より現実的な場面で使用する力をつけるための指導記述が提示されていた。しかし、音変化、強勢、区切りについては、どの教科書においても特に変更は見られず、これでは教員の裁量次第で活用がされるか否かが変わってしまうので、これらについても多少の修正は必要であることが今後の課題として指摘している。

杉内（2022）は令和 2 年度検定済の中学校英語検定教科書における発音を中心とした音声指導項目に焦点をあて、発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり（連結・脱落・相互同化）、ポーズ（意味グループごとの区切り）、音声表現指導の 6 項目を整理し、それらの提示内容や提示方法を分析し、6 社の教科書はどのような工夫を行っているのか、またどのような違いがあるのかを考察し、中学校で行われている発音指導の実態

についての調査をまとめている。結果として、教科書それぞれに特徴があり、発音指導項目に対する重点の置き方や提示方法・提示頻度には差があることが明らかになった。さらに、教科書は改訂がされるたびに発音指導項目が充実し、その提示方法は豊富になることにも言及しており、発音指導に対する意識の向上の現れであると歓迎している。

2.3 順序分析

教科書の音声事項を順序の視点から分析しているのが加藤（2008）である。加藤（2008）は中学校検定教科書 *NEW HORIZON* における音声指導項目の扱われ方を分野と順序の観点から分析をした。その結果、3年間の発音指導の中で扱われる内容の多くは母音であり、英語学習が始まる1年生では、特に多くの母音に関わる発音を学習していることが分かった。一方、子音は調音点の違いについては丁寧に扱われており、その指導を通して日本語と英語の違いに着目させる狙いがあると考えられる。

また、手島（2011）は中学や高校における発音指導の内容を吟味する必要性を主張しており、その視点の一つとして「扱う事項は、どんな順序で、いつごろ扱うのがよいか」（p. 42）という点を挙げている。

指導内容の順序となると、分節音と超分節音のどちらを優先的に指導すべきかという二項対立の議論になるが、どちらか一方を優先すべきという主張もあれば、双方をバランスよく指導すべきであるという主張もあり、統一見解を得るには至っていないのが現状である（Sugiuchi, 2014; Wang, 2022）。

2.4 リサーチ・クエスション

様々に変化する学習指導要領に合わせて、検定教科書は発音指導項目に触れる量が増えており、扱われる内容は多岐に渡るようになってきている。しかし、令和4年度以降に施行された学習指導要領に則った高等学校の教科書を分析した研究はまだない。

本稿では、以下の3点をリサーチ・クエスションとして教科書の分析を行った。

- 1) 発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、音のつながり、ポーズにおいて、4種類の教科書はどのような工夫を行っているのか、またどのような違いがあるのか。
- 2) 令和3年度検定済みの教科書は、柳田（2017）で扱われた教科書からどのような変化があったのか、そしてその変化から現在の高等学校ではどのような発音指導が行われているのか。
- 3) 令和3年度検定済みの教科書は、発音指導項目をどんな順序で提示をしているのか。

3. 方法論

本稿の分析は、筆者が教科書14冊すべてに目を通し、発音指導項目の提示の有無、提示方法、教科書のどのページで扱われているかという提示箇所から推測される重点項目について、分析項目ごとにまとめた。

3.1 分析対象

分析対象としたのは、令和4年度から年次進行で使用されている令和3年度検定済の教科書4種類であり英語コミュニケーションでは *All Aboard!* (AA)、*Power On* (PO)、*ENRICH LEARNING* (EL)、論理・表現では *Vision Quest* の3学年分、合計14冊のことである。『高等学校用教科書目録（令和4年度使用）』（2021）によると、教科書には12社の英語コミュニケーションの教科書と、10社分の論理・表現の教科書がある。さらに高等学校の教科書では、同一科目においても1社で複数の教科書を作成されることがある。本稿では、東京書籍が出版する英語コミュニケーション英語の教科書3種類と啓林館が出版する論理・表現の教科書を分析の対象とした。なお、AA、PO、ELは学年が上がっていくにつれて、AAⅠ、AAⅡ、AAⅢのようになるが、*Vision Quest* は *Vision Quest I Standard* (VQⅠS)、*Vision Quest I Advanced* (VQⅠA)、*Vision Quest II Ace* (VQⅡA)、*Vision Quest II Hope* (VQⅡH)、*Vision Quest III* (VQⅢ) と学年だけでなく難度によって教科書が分かれている。上記の教科書は、英語コミュニケーションと論理・表現それぞれの科目の検定教科書において最も採択数の多い出版社の教科書である（東京都教育委員会編，2021）。よって、高等学校での指導において、最も影響力のある教科書であると推察される。その教科書の内容を分析することが、発音指導の実態を調査するうえで最も有効な手段であると考えた。本稿では、各教科書の英語の音声・発音のしくみの提示を行っている部分や独立したコーナーをチェックした。なお、日本で教育を受けているほぼ全員の英語学習者が学習の過程で触れるものを分析対象にする観点から、教員用マニュアルや付属CD、教科書ガイドは分析対象に含まない。

3.2 分析項目

分析項目は柳田（2017）にならい、発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、音のつながり、ポーズの6項目とし、発音指導項目ごと・教科書ごとに比較しながら分析を行った。強勢とは語・句・文における強勢、イントネーションとは文におけるイントネーションであり、orを含む選択疑問文でのイントネーションや平叙文を疑問の意味で用いるイントネーション、そしてwh-疑問文を聞き返して用いるイントネーションも含まれる。音のつながりとは連結、脱落、相互同化の3種類を指し、ポーズとは意味のかたまりを意

識した発音指導のことである。

4. 結果

以下に、発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、音のつながり、ポーズの提示分布を表1にまとめた。なお、○は該当の分析項目の表記があることを表し、×は表記がないことを表している。英語コミュニケーションの教科書である AA、PO、EL は3 学年分をまとめた結果を記載している。一方、論理・表現の教科書である VQ は前述しているように学年だけでなく難度によって教科書が分かれているので、本稿では、それぞれの教科書の結果を記載してある。

表1は4種類の教科書がどの発音指導項目を表記しているかをまとめたものである。

表1

発音指導項目の提示分布

	発音記号	発音方法	強勢	イントネーション	音のつながり	ポーズ
AA	×	○	○	×	×	×
PO	○	○	○	○	○	×
EL	○	×	×	×	×	×
VQ I S	×	×	○	×	×	×
VQ I A	×	×	○	×	×	×
VQ II A	×	×	○	×	×	○
VQ II H	×	×	○	×	×	×
VQ III	×	×	○	×	×	×

AA は発音方法と強勢についてのみ扱われており、それ以外の発音指導項目に関して提示を行っている部分や独立したコーナーは見られなかった。一方、PO はポーズ以外の発音指導項目を網羅しており、PO I から PO III までまんべんなく様々な形で発音指導項目にページを割いていた。EL に関しては、EL I で Pronunciation and Phonics Chart というページを設けているが、それ以外の発音指導項目について扱う箇所はなかった。VQ では、VQ I S から VQ III の全ての教科書で、強勢が扱われており、VQ II A でのみポーズに関する言及があった。なお、各発音指導項目の結果については、リサーチ・クエスチョンの 1) と 2)

に対応するために、令和3年度検定済の教科書を分析した結果と柳田（2017）が分析した結果を比較するように示す。

4.1 発音記号

本稿では、柳田（2017）で扱われている母音と子音を分析対象とした。教育表記としての実用性が認められている表記法を用い、各教科書で使用される母音・子音を22の母音（表1）と24の子音（表2）に分類した。この表記法により、本稿において母音は、前舌母音[i:, i, e, æ]、中舌母音[ə, ʌ, ɔɹ]、後舌母音[u:, u, ɔ:, ɑ, ɑ:]、二重母音[ei, ai, au, ou, ɔi, iəɹ, eəɹ, uəɹ, əəɹ, ɑəɹ]と表記する。なお、三重母音[eiəɹ, aiəɹ, auəɹ]は分類対象に含んでいない。なお、子音では、[ts]、[dz]、[tr]、[dr]は破擦音と分類すること（松坂, 1986）もあるが、本稿では上記の通り、教育表記としての実用性が認められている表記法にならい、子音連続に分類した。杉内（2022）では子音連結という用語を使っているが、柳田（2017）が子音連続という用語を使用しているため、こちらを採用した。

本稿で分析対象としている令和3年度検定済の高等学校英語教科書の中で発音記号を扱っているのは、POとELのみであった。なおAAとPOは本課内の新出単語に発音記号は併記しているが、ELは巻末に「New Words and Phrases」という形で新出単語がまとめられており、そこに発音記号が併記されているにとどまっている。

表2は母音の、表3は子音の提示分布と提示箇所を表している。なお、柳田（2017）において、各母音、子音でカバーされている教科書数が異なることが報告されているので、本稿では、カバー率100%（全ての教科書で扱われている）は○、カバー率0%（どの教科書でも扱われていない）は×、カバー率が25～75%（何冊かの教科書で扱われている）は△で表す。

表2

母音の提示分布と提示箇所

	PO		EL		柳田（2017）	
	提示分布	提示箇所	提示分布	提示箇所	提示分布	提示箇所
i:	○	別 セ ク シ ヨ ン	○	巻 末	○	巻 頭 ・ 本 課 ・ 巻 末
i	○		○			
e	○		○			
æ	○		○			
ə	○		○			

高等学校英語教科書における発音指導項目の分析

ʌ	○		○		○	
əɹ	×		○		△	
u:	○		○		○	
u	○		○		○	
ɔ:	○		○		△	
ɑ	×		×		○	
ɑ:	○		○		△	
ei	○		○		○	
ai	○		○		○	
au	○		○		○	
ou	○		○		○	
ɔi	○		○		△	
iəɹ	×		○		△	
eəɹ	○		○		△	
uəɹ	○		○		×	
ɔəɹ	×		×		△	
ɑəɹ	×		×		×	

表 3

子音の提示分布と提示箇所

	PO		EL		柳田 (2017)	
	提示分布	提示箇所	提示分布	提示箇所	提示分布	提示箇所
p	○	別 セ ク シ ョ ン	○	巻 末	○	巻 頭 ・ 本 課 内 ・ 巻 末
b	○					
t	○					
d	○					
k	○					
g	○					
f	○					
v	○					
θ	○					
ð	○					

s	○		○		○	
z	○		○		○	
ʃ	○		○		○	
ʒ	○		○		○	
h	○		○		△	
tʃ	○		○		○	
dʒ	○		○		○	
m	○		○		○	
n	○		○		○	
ŋ	○		○		○	
l	○		○		○	
w	○		○		△	
r	○		○		○	
j	○		○		△	
子音連続	○		×		△	

分析結果から、令和 3 年度検定済の教科書の中では、ほとんどの母音がカバーされていた。特に、弱母音の[ə]は目立たない音節に含まれる母音として、PO I にて別セクションにて取り上げられて説明されている。しかし、中舌母音[ər]が PO で、後舌母音[a]が PO と EL で、二重母音[iər]が PO で、二重母音[ɔər, aər]が PO と EL でカバーされていなかった。また、柳田（2017）との比較から、教科書の改訂を経てもほとんどの母音がカバーされていることが分かった。後舌母音[ɔ:, a:]、二重母音[ɔi, eər, uər]は柳田（2017）より扱われるようになっている。一方、後舌母音[a]と二重母音[ɔər]は柳田（2017）より扱われなくなってしまった。中舌母音[ər]と二重母音[iər]は扱われる程度は教科書によって様々であり、二重母音[aər]は全くカバーされていない。提示箇所については、PO では別セクションを設けているが、EL は巻末での提示のみとなった。柳田（2017）では巻頭、本課内、巻末と様々な提示箇所が確認できたが、教科書の改訂を経て、本課内で発音記号が提示されなくなった。

子音においては、令和 3 年度検定済の教科書は子音連結以外の全てをカバーしていた。子音連結は教科書によって扱いが異なった。摩擦音[h]と移行音[w, j] は柳田（2017）より扱われるようになっている。また、柳田（2017）との比較から、母音の場合と同じように、教科書の改訂を経てもほとんどの子音がカバーされていることが分かった。提示箇所については、母音と同様の結果となっている。

ここまで、発音記号を発音指導項目として提示している分野についての結果を見てきたが、教科書による母音・子音の扱いには大きな差はないことがわかった。また、母音よりも子音の方がよりカバーされていた。母音、子音ともに、柳田（2017）より提示分布においては改善が見られたが、提示箇所においては本課内で扱われなくなってしまった。

4.2 発音方法

発音方法については、AAとPOしか扱っていなかった。AAでは、AA I とAA II の本課内の新出単語にカタカナ表記がついており、POではPO I の巻頭に「発音ガイド」というコーナーで取り扱われている発音記号の発音の仕方について説明があった。なお、POでは母音[i:, i, e, æ, ɑ:, ɔ:, u:, u, ʊ, ə, ʌ]にのみ発音方法の説明があり、二重母音や子音は、発音練習をするための例が3つずつ提示されているにとどまっている。以下が発音方法の説明の例である。

[i:] 日本語の「イ」より唇を横にひっぱって、「イー」のように発音する。

[i] [i:]よりリラックスして「イ」のように出す音です。

(Power On English Communication I, p. 12)

また、PO I からPO IIIまで一貫して、本課内の新出単語のいくつかが「発音やアクセントに注意すべき語」を表すマークがついていた。主に、カタカナと強勢を置く位置が異なっていたり（例：pattern）、スペル通りの発音ではない場合（例：calm）に、マークは付けられている。

柳田（2017）では、具体的な発音方法を提示しているのは10冊中5冊にとどまり、提示内容や提示箇所は教科書によって異なっていた。発音記号とカタカナ表記を併記しているものだったり、母音と子音の一部のみに説明が加えられていたり、顔や舌のイラストを使って説明をしていたりと、提示内容や説明方法は様々であった。提示箇所は巻末や本課内の2カ所のみであり、巻頭で扱われているケースはないと報告されている。

本稿で分析した令和3年度検定済の教科書14冊と柳田（2017）が分析した平成28年度検定済みの教科書10冊を比較すると、発音方法に関する記載が少なくなり、提示内容も乏しくなったことが分かる。

4.3 強勢

柳田（2017）にならい、教科書ごとに語強勢と文強勢について分析を行い、強勢については、AA、PO、VQ I S、VQ I A、VQ II A、VQ II H、VQ IIIが扱っていたということがわ

かった。AAはAA I とAA II の本課内において、新出単語で強勢を置くところが太文字になっていた。VQ I SからVQ IIIでは、Logic Focus Speechというスピーチの練習をするためのページにおいて、スピーチをする際に内容に合わせて強弱をつけ、重要なところは強くゆっくり話すことに言及されているだけであった。POではPO I 別セクション「Sounds Interesting! 2」で音節の説明を導入して語強勢について、「Sounds Interesting! 3」で文末の内容語の説明を導入して文強勢についてカバーしていた。また、PO II 別セクション「Sounds Interesting! 2」で第一強勢と第二強勢について扱っていた。さらに、PO IIIでは別セクション「Sounds Interesting! 1」で強勢の変化について、例を出して説明がなされていた。以下がその例である。

辞書の強勢	⇒	変化した強勢
A: Do we have any plans for this afternoon?		B: Yes. We're going to have afternoon tea.
(aftが第二強勢、noonが第一強勢)		(aft、teaが第一強勢、noonが第二強勢) (Power On English Communication III, p. 17)

柳田 (2017) では、語強勢について扱っているのは教科書10冊中3冊であり、文強勢は全ての教科書でカバーしていた。語強勢の表し方は、強勢記号が使われていたり、強く読まれる部分が○で囲まれていたり教科書によって違いがあった。文強勢も同様で、教科書によって違いがあり、大小の黒丸や太字が使われていたり、強く読まれる部分が○で囲まれていた。

以上の結果から、教科書の改訂を経ても、語強勢と文強勢のそれぞれがカバーされているということが分かった。また、POでは語強勢について、音節の概念を説明するところから、強勢の変化まで別セクションを設けて丁寧に説明をしていた。

4.4 イントネーション

令和3年度検定済みの教科書では、POのみがイントネーションについて扱っていた。PO II の別セクション「Sounds Interesting! 5」において、イントネーションの3つの型である下降、上昇、下降上昇を提示し、下降は断定や完結、上昇は疑問や未完結、そして下降上昇は言い残し、のようにそれぞれの意味を例と矢印（↘、↗）を使って説明している。以下がその例である。

A: Is this the way to ↗ Tokyo? (疑問)

B: I think ↘ so. (断定)

I ↙ think so. (言い残し)

(Power On English Communication II, p. 153)

柳田 (2017) では、イントネーションの扱いに関しては教科書によってかなりばらつきがあることが報告されている。全く扱わない教科書もあれば、肯定・命令文、Yes-No疑問文、疑問詞疑問文、選択疑問文、付加疑問文、列挙、聞き返し、繰り返し、呼びかけというイントネーションの全ての基本的な型をカバーしているものもあった。一方で、提示箇所は本課内であるケースが多く、別セクションを設けている教科書もあったが、巻頭や巻末で扱う教科書はなかった。

以上の結果から、教科書改訂後のイントネーションの扱いは、少なくなったと言える。

4.5 音のつながり

単語間の音のつながりは PO のみでカバーされており、スラー () を使って表されていた。PO I では同じ子音が連続する場合、PO II では子音と母音が連続する場合がそれぞれ別セクション「Sounds Interesting!」で扱われている。また、連結、脱落、同化の分類については、連結と脱落は例とともに説明もされているが、相互同化については触れられていなかった。

柳田 (2017) においては、教科書のほとんどが音のつながりを扱っていることが報告されており、表記記号としてスラー () を使って音のつながりが表示されていた。また、連結、脱落、同化の順で多く提示がなされており、説明の仕方も連結、脱落、同化の違いを丁寧に説明している教科書もあれば、一切の解説をしていない教科書もあるなど扱う程度は様々であった。なお、提示箇所は巻頭、本課内、別セクションであり、巻末で音のつながりをカバーする教科書はなかった。

以上の結果から、音のつながりを扱う教科書は改訂を経て少なくなった。また、連結と脱落については説明と例などが提示されているが、同化に関しては令和 3 年度検定済みの教科書では学ぶ機会がなくなってしまった。

4.6 ポーズ

ポーズは「意味グループごとの区切り」(上田・大塚, 2011) と定義し、分析をおこなった。令和 3 年度検定済みの教科書でポーズについてカバーしているのは、VQ II A のみであった。さらに扱われていると言っても、Logic Focus Speech というスピーチの練習をする

ためのページにおいて、スピーチをする際に気を付ける項目として「意味の切れ目を意識して話す」(p. 50)と書かれているだけであった。

一方、柳田(2017)でも「あまり重点が置いて取り上げられていなかった」(p. 88)とされているように、教科書10冊中5冊でのみスラッシュの記号を使って扱われており、3冊しか解説を載せていなかった。なお、提示箇所は本課内と別セクションである。

以上の結果から、ポーズに関しては、教科書の改訂を経ても、ページを割いて扱われる項目ではないということが分かった。また、提示箇所も別セクションであることが多く、解説も少なかった。

4.7 その他の発音指導事項

ここでは、発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり、ポーズという分類には含まれない発音指導項目について扱う。

POは別セクション「Sounds Interesting!」において、音節、リズム、弱形と強形、イギリス英語とアメリカ英語、そして早口言葉と幅広く発音指導項目についてカバーしている。まず、音節についてはPOの発音指導項目を扱う「Sounds Interesting!」という別セクションの最初のテーマとして扱われている。ここでは、音節について説明をし、ストレスとstress、テキストとtextなどカタカナと英語を強勢のある音節に注意しながら読みさせることで、日本語と英語の音節の違いについて体感させるような工夫がある。POIIにおいて、リズムは「目立つ音節のビート」(p. 137)と表現されており、例文を提示しながら大小の●を使って、目立つ音節が規則的に現れることを説明している。弱形と強形は、forやhasを例に挙げて「ふつうは弱形の発音で使われ、文末に来た場合などに強形が使われる」(p. 169)と解説されている。以下にforとhasが弱形と強形で使われている例文を示す。

A: What's it **for** /fɔ:r/? B: It's **for** /fɔ:r/ opening a can.

A: **Has** /hæz/ it started? B: Yes, it **has** /hæz/!

(Power On English Communication II, p. 169)

POIIIでは、イギリス英語とアメリカ英語の違いをつづり字、発音、文法など、様々な点で異なるということに触れ、その中で発音の違いについてtomatoやvitaminなどの発音wo例に説明している。そして、POの発音指導項目を扱う「Sounds Interesting!」という別セクションの最後のテーマとして扱われているのが、早口言葉である。これは発音の上達を目指しており、早口言葉を練習することで、はっきりした発音や滑らかな発音が出来るようになり、より効果的な情報伝達につながることに言及している。

論理・表現の教科書である VQ のシリーズでは、Logic Focus Speech というスピーチの練習をするためのページにおいて、大きな声ではっきりと発音することと、早口にならないことが効果的なスピーチへのアドバイスとして書かれている。

なお、柳田（2017）において、発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、音のつながり、ポーズという分類には含まれない発音指導項目についての分析結果はなかった。

4.8 リサーチ・クエスチョン 1 に対して

本稿では、一つ目のリサーチ・クエスチョンとして、発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、音のつながり、ポーズにおいて、4 種類の教科書はどのような工夫を行っているのか、またどのような違いがあるのかについて調べた。結果として、教科書によって発音指導項目の扱いに関する差は大きかった。例えば、PO のように本課とは別のセクションを設けて一通りの発音指導項目に触れている教科書もあれば、EL や VQ のように巻末のみで扱ったり、本課内の最低限のスペースを割り、発音以外の事項に重点を置く教科書もあった。しかし、全体的に発音指導項目を扱う教科書は少なく、強勢に関してはほぼ全ての教科書で何かしらの形で触れられていたが、発音記号と発音方法については 2 種類の教科書でしか扱われておらず、イントネーション、音のつながり、ポーズに至っては 1 種類の教科書でしかカバーされていなかった。

4.9 リサーチ・クエスチョン 2 に対して

二つ目のリサーチ・クエスチョンとして、令和3年度検定済みの教科書は、柳田（2017）で扱われた教科書からどのような変化があったのか、そしてその変化から現在の高等学校ではどのような発音指導が行われているのかについて分析をした。その結果、学習指導要領改訂前と比べて、全体的に教科書間で発音指導項目を扱う程度の差が大きくなった。一方、項目別の変化を見ていくと、発音記号は提示分布において改善が見られたが、提示箇所においては本課内で扱われなくなってしまった。また、発音方法、イントネーション、音のつながりに関する記載は少なくなり、提示内容も乏しくなってしまった。一方、教科書の改訂を経ても丁寧に扱われているのは、強勢のみであった。しかし、ポーズは教科書改訂があっても変わらず、ほとんどカバーされていなかった。

4.10 リサーチ・クエスチョン 3 に対して

三つ目のリサーチ・クエスチョンとして、令和 3 年度検定済みの教科書は、発音指導項目をどんな順序で提示をしているのかについて分析をした。本稿で分析をした教科書のうち、PO のみが発音指導事項をほぼ網羅していたので、PO における発音指導項目の提示順

序を以下に示す。

表 4

発音指導項目の提示順序

<i>Power On I</i>	<i>Power On II</i>	<i>Power On III</i>
p.12 発音ガイド（発音記号の発音の仕方を説明）	p.23 目立たない音節（弱母音）	p.17 強勢の変化
p.40 声の抑揚	p.51 目立つ音節（第一強勢と第二強勢）	p.51 イギリス英語とアメリカ英語
p.41 音節（音のまとまり）	p.105 音のつながり（子音と母音が連続する場合）	p.64 早口言葉
p.55 語の強勢（目立つ音節）	p.137 リズム（目立つ音節のビート）	
p.103 文の強勢（文末の内容語）	p.153 イントネーション（その型と意味）	
p.117 音のつながり（同じ子音が連続する場合）	p.169 弱形と強形	

3 学年分の教科書において、最初に提示されているのは母音と子音の発音記号とその発音方法である。そのあとに、イントネーション、音節、語と文の強勢、音変化の基本事項が扱われている。2 学年の教科書では、1 学年の教科書と同じように、音節、音変化、イントネーションについて触れられているが、その内容はより高度なものとなっている。また、リズムや弱形と強形も教科書の後半で扱われている。3 学年の教科書では、強勢の位置が変化することを取り上げ、それ以外ではイギリス英語とアメリカ英語の違いや早口言葉など、発音に関しての興味を広げるための事項が扱われていた。

5. 考察

以上、発音指導項目 6 項目について分析をすると、結果として、教科書間の発音指導項目における重点の置き方や提示方法に大きな違いがあった。柳田（2017）と同様に、改訂後は教科書によって発音指導項目の扱いに関する差は大きかった。そして、全体的に発音指導項目を扱う教科書は少なくなっていた。また、発音指導項目に関しては、全体的に教科書間で発音指導項目を扱う程度の差が大きくなった。強勢は、教科書が改訂される前も後も、ほとんどの教科書で何かしらの形で触れられおり、発音記号に関しても扱われ方に

高等学校英語教科書における発音指導項目の分析

ついて大きな変化は見られなかった。一方、発音方法、イントネーション、音のつながりについてはあまり扱われなくなってしまい、ポーズについては改訂前後ともにあまり扱われていなかった。

全体的に発音指導項目を扱う教科書が少ないという状況については、言語活動量の増加による指導項目の取捨選択が要因の一つだと考えられる。『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編』（文部科学省編, 2018）では、外国語科の改訂の趣旨を説明し、その要点を以下のように説明している。

統合的な言語活動を通して「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の五つの領域（以下「五つの領域」という。）を総合的に扱うことを一層重視する科目と、話すことと書くことによる発信能力の育成を強化する科目をそれぞれ新設し、外国語でコミュニケーションを図る資質・能力を育成するための言語活動を充実させることとした。

(pp. 6-7)

教科書にはページ数という制限があるため、統合的な言語活動を充実させるということは、必然的に他の事項を削減する必要が生じる。そのような状況になり、発音項目が削減の対象になったと推測される。

強勢以外の項目が教科書であまりカバーされていないことについては、学習指導要領で求められていることとは反対の結果となっている。学習指導要領では、(ア) 語や句、文における強勢、(イ) 文におけるイントネーション、そして (ウ) 文における区切りの3項目を具体的な発音指導項目としている（文部科学省編, 2018）。本来であれば、強勢、イントネーション、ポーズに重点が置かれるべきであるが、提示頻度や提示箇所の観点から、この中でしっかり取り扱われているのは強勢のみである。これは、手島（2011）が述べているように、強勢という発音項目が「正しく認識していなければ、自分の発した英語が相手に理解されにくくなるし、それに留まらず、相手の発した英語を間違っ聞き取る可能性がある」（p. 35）からで、相手とのコミュニケーションにおいて大切な習得項目だからであると推測される（Walker, Low, & Setter, 2021）。さらに、学習者への分かりやすさという側面も寄与していると考えられる。王（2013）では、「英語の教科書の内容を学習者の観点から考察する必要性」（p. 251）について指摘しているが、これは本課内の本文だけでなく教科書に記載されている全ての事項について当てはまる内容であり、発音指導項目も例外ではない。強勢には規則性があるので学習者にとって理解しやすい。一方、イントネーションやポーズにおいて規則性はあるが、文法的知識や文脈判断というプラスアルファの能

力が必要となり、他の発音指導項目と比べると分かりやすさに欠けるのではないかと推測される。

杉内 (2022) が「できるだけ具体的な記述があることが生徒の発音能力向上に寄与する」(p. 29) と述べているように、発音方法についての説明があるだけで、学習者である生徒にとっては勉強の大きな助けになる。教える立場の教員が発音方法について丁寧に説明が出来れば、発音方法に関する記述が教科書になくてもよい。しかし、「自らの英語の発音について指導を受けたことがなく、英語音声学に関する基本的な知識もない者が、英語教員になれる」(p. 42) と 手島 (2011) は英語教員養成の現状を嘆いているように、現実的には発音指導を授業内で十分に行うことは難しい状況である。

また、分節音と超分節音というカテゴリで提示順序を考察すると、発音指導項目は分節音の基本事項、超分節音の基本事項、超分節音の発展事項という順序で提示されている。これは分節音や強勢は初学者にとって学びやすく、超分節音であるイントネーションはコンテキストとの関係を考慮する必要があるので、一定の英語力を備えた段階での指導が適切であるという Sugiuchi (2014) の考察と一致している。よって、本稿で分析した発音指導項目は学習者にとって学びやすく並べられていると考えられるが、指導順序に関して先行研究例が少ないことから、今後の更なる調査が必要である (手島, 2011)。

6. 結論と今後の課題

本稿では、令和 3 年度検定済みの教科書における発音を中心とした音声指導項目に焦点をあて、発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、音のつながり、ポーズの 6 項目を整理し、提示の有無、提示方法、教科書のどのページで扱われているかという提示箇所から推測される重点項目について、分析項目ごとにまとめた。結果として、教科書それぞれに特徴があり、発音指導項目に対する重点の置き方や提示方法・提示頻度には差があることがわかり、この点に関しては先行研究として挙げた杉内 (2022) と同じ結果であった。しかし、改訂前の教科書と比べると、明らかに発音指導項目が減っていた。これは危惧されるべき状況である。以下に、教科書において改善していく必要があると考えられる課題を 2 つ提示する。

一つ目は言語活動の中で発音指導を組み入れていくことである。スピーキング活動やリスニング活動を行う際に、音声と意味をつなぎ合わせるプロセスを指導手順に盛り込んでいきたい (土屋, 2004)。また、発音指導は単独で行うよりも他技能と結びつけるべきであると言われている (Munro & Derwing, 2015; Levis, 2018)。現在の教科書では、別セクションや巻末で扱われることがほとんどであり、改善が必要である。二つ目は指導言をより

充実させたい。生徒が一人でも発音を練習できるようなヒントが教科書に記載されていれば、生徒にとっての発音に対するハードルを下げることができ、発音に意識を向けることに繋がると期待できる（杉内, 2022; 王, 2013）。また、発音に対する知識がないことから指導に自信のない教員がいるという状況を踏まえると、生徒が自分自身で発音を学ぶことができる工夫が必要である（有本, 2022; 手島, 2011）

発展した教育に関わる高等学校の教科書は、日本全国の高校生の英語学習を下支えする大切な学習教材であり、インプット教材である。グローバル社会で活躍が期待される高校生の学習環境を、教科書という側面からより良質なものにしていきたい。

参考文献

- Apple, M. W., & Cristian-Smith, L. K. (Eds). (1991). *The Politics of the Textbooks*.
Routledge.
- Levis, M. J. (2018). *Intelligibility, oral communication, and the teaching of pronunciation*. Cambridge University Press.
- Munro, J. M., & Derwing, M. T. (2015). Intelligibility in research and practice: teaching priorities. *The handbook of English pronunciation*, 377–396.
- Sugiuchi, M. (2014). *The effect of segment- and suprasegmental-focused teaching on perceived comprehensibility* [Unpublished master's thesis]. Graduate School of Education, Waseda University.
- Walker, R., Low, E., & Setter, J. (2021). *English pronunciation for a global world* [PDF].
Oxford University Press. www.oup.com/elt/expert
- Wang, X. (2022). Segmental versus Suprasegmental: Which One is More Important to Teach?. *RELC Journal*, 53(1), 194–202.
- 有本純 (2022) 「英語発音指導の課題と解決策」『関西国際大学研究紀要』, 23, 1-13.
- 上田洋子・大塚朝美 (2011) 「発音と音声のしくみに焦点をあてた中学校英語教科書分析—インプットの基礎を考察する—」『大阪女学院大学紀要』, 7, 15–32.
- 上田洋子・大塚朝美 (2013) 「中学校英語検定教科書における音声指導項目の分析—新旧学習指導要領での扱いの変化について—」『大阪女学院大学紀要』, 10, 1–15.
- 加藤みち子 (2008) 「中学英語教科書に見る音声指導の扱われ方」『岩手大学英語教育論集』, 10, 49–65.
- 啓林館編 (2021) 『Vision Quest English Logic and Expression I Advanced』 .
- 啓林館編 (2021) 『Vision Quest English Logic and Expression I Standard』 .
- 啓林館編 (2022) 『Vision Quest English Logic and Expression II Ace』 .

- 啓林館編 (2022) 『Vision Quest English Logic and Expression II Hope』 .
- 啓林館編 (2023) 『Vision Quest English Logic and Expression III』 .
- 杉内光成 (2022) 「発音指導に焦点を当てた中学校英語教科書分析」『Dialogue』, 20, 15-34.
- 田邊祐司 (2018) 「英語科における「主体的・対話的で深い学び」：音声指導を中心に」『専修大学外国語論集』, 68, 39-52.
- 田邊祐司・中野香 (1999) A constructive examination of English pronunciation work: The case of college pron-related textbooks. 『山陽論叢』, 6, 65-86.
- 土屋澄男 (2004) 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』 研究社.
- 手島良 (2011) 「日本の中学校・高等学校における英語の音声指導について—発音指導の現状と課題—」『音声研究』, 17(1), 31-43.
- 東京書籍編 (2021) 『All Aboard! English Communication I』 .
- 東京書籍編 (2022) 『All Aboard! English Communication II』 .
- 東京書籍編 (2023) 『All Aboard! English Communication III』 .
- 東京書籍編 (2021) 『ENRICH LEARNING ENGLISH COMMUNICATION I』 .
- 東京書籍編 (2022) 『ENRICH LEARNING ENGLISH COMMUNICATION II』 .
- 東京書籍編 (2023) 『ENRICH LEARNING ENGLISH COMMUNICATION III』 .
- 東京書籍編 (2021) 『Power On English Communication I』 .
- 東京書籍編 (2022) 『Power On English Communication II』 .
- 東京書籍編 (2023) 『Power On English Communication III』 .
- 東京都教育委員会編 (2021) 『令和4年度使用 都立高等学校及び都立中等教育学校(後期課程)用教科書 教科別採択結果(教科書別学校数)』 [PDF].
https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/press/press_release/2021/files/release20210826_01/reference.pdf
- 東後勝明・御園和夫・松坂ヒロシ・高本裕迅・阿野幸一 (2009) 『英語発音指導マニュアル』 北星堂書店.
- 文部科学省編 (2018) 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編』 .
- 文部科学省編 (2021) 『高等学校用教科書目録(令和4年度使用)』 [PDF].
https://www.mext.go.jp/content/20210604_mxt_kyokasyo02-000014470_4.pdf
- 松坂ヒロシ (1986) 『英語音声学入門』 研究社.
- 柳田綾 (2017) 「効果的な音声指導項目の提示とは—高等学校英語教科書分析から—」『桜花学園大学学芸学部研究紀要』, 9, 72-92.
- 王林鋒 (2013) 「英語教育における教科書研究の展望と課題」『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 53, 247-253.